

学校编码: 10384
学号: k1003013

分类号 _____ 密级 _____
UDC _____

厦 门 大 学

硕 士 学 位 论 文

大正时期志贺直哉短篇小说的研究

——以《清兵卫与葫芦》和《在城崎》为中心

志賀直哉の大正時代の短篇小説に関する研究

——『清兵衛と瓢箪』と『城の崎にて』を中心にして

大正时期志贺直哉短篇小说的研究

张剑虹

张 剑 虹

指导教师姓名: 吴光辉 教授

专业名称: 日语语言文学

论文提交日期: 2016 年 10 月

论文答辩时间: 2016 年 12 月

学位授予日期: 2016 年 12 月

答辩委员会主席: _____

评 阅 人: _____

2016 年 12 月

指导教师: 吴光辉 教授

厦门大学

厦门大学博硕士

厦门大学博硕士

厦门大学学位论文著作权使用声明

本人同意厦门大学根据《中华人民共和国学位条例暂行实施办法》等规定保留和使用此学位论文、并向主管部门或其指定机构送交学位论文（包括纸质版和电子版）、允许学位论文进入厦门大学图书馆及其数据库被查阅、借阅。本人同意厦门大学将学位论文加入全国博士、硕士学位论文共建单位数据库进行检索、将学位论文的标题和摘要汇编出版、采用影印、缩印或者其它方式合理复制学位论文。

本学位论文属于：

1. 经厦门大学保密委员会审查核定的保密学位论文、
于 年 月 日解密、解密后适用上述授权。

2. 不保密、使用上述授权。

（请在以上相应括号内打“√”或填上相应内容。保密学位论文应是已经厦门大学保密委员会审定过的学位论文、未经厦门大学保密委员会审定的学位论文均为公开学位论文。此声明栏不填写的、默认为公开学位论文、均适用上述授权。）

声明人（签名）：

年 月

厦门大学博硕士

要旨

日本近代文学史において明治・大正・昭和の三つの時期に活躍していた作家として、志賀直哉は挙げられる。白樺派の代表作家として氏の短篇小説は、中国でも日本でもよく知られている。また、氏が残してきた作品の数は大体 120 篇で、随想や雑録を含めて考えれば、ほぼ 200 篇に近い、その中で唯一の長編『暗夜行路』、中編小説の『大津順吉』、『和解』、『ある男、其姉の死』を除き、殆ど短篇小説なので、「小説の神様」と讃えられる。

本研究では、主に志賀直哉の大正時期の作品『清兵衛と瓢箪』と『城の崎にて』という二つの短篇小説をめぐって検討してみた。この時期の創作活動は、氏にとって大切な転換期とも言える。大正 2 年、志賀直哉は父の反対を無視し、家を出て勘解由小路康子と結婚した。その後、長女が夭折して流浪と転居を重ねた。特に大正 3 年、死の影を見るような交通事故を経験した後、氏の文学に反抗や悶着の暗い色調が薄れる。氏はこのような一連の挫折を経験してから意識的に調和的理想主義的な作風へ転換した。なぜこの小説創作の空白期は転換期と言えるのだろうか。志賀氏は、強烈な自我意識によって、他者を排除し周囲と対立対抗し、最終的に苦しい境遇を乗り越え、不思議な平安静寂へ進んでいったのである。従って、この時期を特記すべき必要があると思われる。

本稿は序論、本論と結論三つの部分からなる。まず序論で、本稿の先行研究と問題意識、研究の目的、方法及び意義を述べている。次に本論である。第一章と第二章、第三章、第四章からなっている。第一章では志賀直哉の生い立ちと文学活動について紹介する。第二章では大正初期に書かれた『清兵衛と瓢箪』に自我中心ないし父との対立を読み取り、瓢箪に関するイメージを分析する。第三章では創作の筆を断った三年後、氏が再び文壇を踏み出す代表作『城の崎にて』の死生という主題をもう一度検討する。第四章では『清兵衛と瓢箪』から『城の崎にて』に至る作者の創作意識の変容を辿り、劇的な生活を体験した後、氏の心境が如何にして変わったのかを探る。そこに、氏の小説の本当の魅力を見つけてみたい。最後に結論である。上述したものをまとめて、結論を出し、

今後の研究課題を提起する。

キーワード：志賀直哉 転換期 魅力

厦门大学博碩

摘要

志贺直哉是日本近代文学史上，活跃于明治、大正和昭和三个时期的作家。作为白桦派的代表作家，他的短篇小说不论在中国还是日本都广为人知。目前，志贺直哉所留下的正式发表的作品大约 120 篇，随想和杂谈等包含在内计算的话约有 200 篇。其中除了唯一的长篇小说《暗夜行路》和中篇小说《天津顺吉》、《和解》以及《一个男人姐姐的死》之外，基本都是短篇小说。志贺直哉被人们称为是日本的“小说之神”。

本文的研究主要是围绕大正时期志贺的两篇短篇小说《清兵卫与葫芦》和《在城崎》来展开探讨的。这个时期的创作活动，对志贺来说是一个重要的转折期。大正 2 年，志贺直哉无视父亲的反对，离开家后与勘解由小路康子结婚。之后，刚出生的长女不幸夭折、居无定所、几经辗转。特别是大正 3 年，直哉经历了一场重大交通事故仿佛看见了死亡的影子，从此志贺的文学中反抗与冲突的灰暗色调越加淡薄。志贺经历了这一连串的挫折之后，下意识地把创作风格转向调和的理想主义发展。为什么把这小说创作的空白期称作是转换期呢？志贺从最初的强调自我意识、排他、与周围的事物对立到最后克服重重困难，进入不可思议的平和心境，可见这个时期是值得特别关注的。

本文分为序论、本论和结论。首先是序论，主要简述先行研究和问题意识、研究目的、方法和意义。其次为本论，由第一章、第二章、第三章和第四章构成。第一章对志贺直哉的经历和文学活动做了介绍；第二章简要论述了自我中心主义、与父亲的对立意识在《清兵卫与葫芦》中的表现及葫芦的文化意象。第三章对停笔三年后重返文坛的志贺代表作《在城崎》中生死主题的进行再探讨。第四章阐述了从《清兵卫与葫芦》到《在城崎》作者创作风格的转变，探讨其戏剧般人生起伏后的心境变化，从中发现志贺直哉小说真正的魅力。最后是对文章的总结和对后续研究的展望。

关键词：志贺直哉 转换期 魅力

目次

はじめに	1
第一章 志賀直哉の文学生涯.....	8
1.1 自然主義の文学思潮.....	8
1.1.1 明治時代.....	8
1.1.2 個人のキャリア.....	9
1.1.3 同時代の作家群—白樺派.....	10
1.2 私小説の時代.....	10
1.2.1 日本文学の登場.....	10
1.2.2 生き立ちと経歴.....	11
1.2.3 私小説の評価.....	12
1.3 戦後の志賀直哉.....	13
1.3.1 言葉の問題.....	13
1.3.2 戦後の文学創作.....	14
1.3.3 短篇小説の評価.....	16
第二章 『清兵衛と瓢箪』と瓢箪の文化イメージ.....	18
2.1 小説の創作動機、粗筋と出版.....	18
2.2 瓢箪の文化イメージ.....	19
2.2.1 伝統文化の変遷.....	19
2.2.2 子供の天性.....	21
2.2.3 控え目で謙虚かつしぶとい性格.....	22
2.2.4 単純な生活態度.....	24
2.3 『清兵衛と瓢箪』の評価.....	25
2.3.1 他者からの評価.....	25
2.3.2 『清兵衛と瓢箪』からの示唆.....	26
第三章 『城の崎にて』—「生と死の主題」の探訪.....	28
3.1 小説の起因、概略、出版と評価.....	28
3.2 死の主題イメージ.....	30

3.2.1 蜂の死.....	30
3.2.2 鼠の死	31
3.2.3 いもりの死.....	32
3.3 生命の文学主題.....	34
3.3.1 生存と死亡の時代命題.....	34
3.3.2 生命と個体.....	35
第四章 志賀直哉の大正時代の小説の魅力.....	39
4.1 自然主義から私小説まで.....	39
4.2 西洋の小説技術から志賀直哉なりの小説まで	40
4.3 自我主義から調和まで.....	42
4.4 西洋の「動」から東洋の「静」まで.....	44
結論	46
参考文献	48
謝辞	51

目 录

前言	1
第一章 志贺直哉的文学生涯	8
1.1 自然主义的文学思潮	8
1.1.1 明治时代	8
1.1.2 个人生涯	9
1.1.3 同时代的作家群——白桦派	10
1.2 “私小说”的时代	10
1.2.1 日本文学的登场	10
1.2.2 作者的经历	11
1.2.3 私小说的评价	12
1.3 战后的志贺直哉	13
1.3.1 语言的问题	13
1.3.2 战后的文学创作	14
1.3.3 短篇小说的评价	16
第二章 《清兵卫与葫芦》和葫芦的文化意象	18
2.1 小说的创作动机、内容和出版	18
2.2 葫芦的文化意象	19
2.2.1 传统文化的变迁	19
2.2.2 儿童的天性	21
2.2.3 低调、谦和又顽强的人格	22
2.2.4 单纯的生活态度	24
2.3 《清兵卫与葫芦》的整体评价	25
2.3.1 他人的评价	25
2.3.2 《清兵卫与葫芦》的启示	26
第三章 《在城崎》中生与死主题的探访	28
3.1 小说的缘起、内容、出版和评价	28
3.2 死亡的主题意象	30

3.2.1 蜜蜂之死.....	30
3.2.2 老鼠之死.....	31
3.2.3 蝾螈之死.....	32
3.3 生的文学主题.....	34
3.3.1 生存与死亡的时代命题.....	34
3.3.2 生命与个体.....	35
第四章 志贺直哉大正时期的小说魅力.....	39
4.1 从自然主义到私小说的形成.....	39
4.2 从西方的小说技巧到志贺直哉式的小说.....	40
4.3 从自我主义到调和.....	42
4.4 从西方的“动”到东方的“静”.....	44
结论.....	46
参考文献.....	48
谢辞.....	51

厦门大学博硕

はじめに

「小説の神様」の名で周知されている志賀直哉は、白樺派の中で作品が一番多いであろう。講談社によって発行された『日本現代文学全集 21 志賀直哉集』から明らかなように、氏の作品は主に四つのタイプに分けられている。最初は自分の欲望を明らかにして、それが満たされてから落ち着いた気持を表現した作品である。例えば『或る朝』、『大津順吉』、『正義派』、『清兵衛と瓢箪』、『范の犯罪』等が挙げられる。次に、『網走まで』、『祖母の為に』、『母の死と新しい母』、『出来事』、『小僧の神様』等を代表として、弱い者への同情と優しさを込めた人間の温かさを味わう作品である。さらに、自然の本質を見抜き人間と自然の間に調和させようとした作品である。例えば『城の崎にて』、『雪の日』、『濠端の住まひ』、『矢島柳堂』等。最後に、自分の目ではっきり見た事実や経験から発想して改作した作品である。例えば、『鳥尾の病気』、『児を盗む話』、『佐々木の場合』、『真鶴』等が挙げられる。

氏の作品の三つ特徴点をめぐって小林英夫は「文体論から見た志賀直哉」で次のように指した。まず「然し」、「が」のような前を否定する接続語が割に少ないことである。そして、文の長さが長短あることである。また、前と後の文には論理の飛躍があることが多いことである。確かに、簡潔で要点を抑える文の特徴は格調が素朴で感情も分かりやすいという二つのことが気づかれるであろう。

実は志賀氏は現実主義の代表として、自分の生活体験から題材を取った作品が多数を占めている。氏の初期の作品は、情と理知をうまく両立させる人生を明晰に観察し、現実主義的に書かれている。悪徳、偽善的な封建思想に逆らった者にヒューマンイズムの視点を与えた。氏自身も「創作余談」、「続創作余談」、「続々創作余談」の中で作品取材について詳しく説明している。

一、志賀作品の先行研究

1、日本における志賀の研究

日本における志賀直哉の研究は昭和初期に遡ることができる。作家論史とし

てまず最初に取り上げるべきものは、やはり広津和郎が1919年に発表した「志賀直哉論」である。厳しく虚偽を狩りたてるリアリストと調和的世界へ沈湎しようとする諦観者という二面性^①を指摘し、氏に関わる文学特質を鋭い目ではっきりと説明し、彼の作品を分析しながら調和の世界へ進む由縁を明白に述べている。^②この論文は、当時の社会背景の下に志賀文学の発展方向を正しく推測し、今後の研究のためのしっかりとした基礎を打ち立てる重要な論であり、出発点となった。広津和郎を始めるとする後進の世代はその道に沿って各分野で研究を深め発展させていった。広津和郎の「志賀直哉論」に続き、研究は今まで90年近い歴史があり優れた成果を見せていた。

舟木重雄、菊池寛、佐藤春夫、正宗白鳥、江口渙、芥川龍之介、小林秀雄、井上良雄、河上徹太郎、唐木順三、谷川徹三、山本健吉、青野季吉、山室静、中野重治、宮島新三郎、片岡良一、勝本清一郎、吉田精一、羽仁新五らは多くの論文やさまざまな同時代評を表し、戦前の志賀研究を行ってきた。^③戦後の志賀研究はさらに膨らみを持ち、要点を押さえた作品研究が非常に多い。この時期でもっとも注目した、中村光夫の『志賀直哉論』である。彼は、志賀文学の私小説性を存分につき青春独語の文学と規定し、その非社会性や無思想性という問題点から説得力のある論証を展開した^④。それに対して、本多五秋の『「白樺派」の文学』は志賀文学の社会性の欠如とか思想性の稀薄を批判し、志賀の欠点のみを論じる風潮に批判的見解を述べている。昭和38年須藤松雄の「志賀直哉の文学」によって、志賀研究は否定論を越える転換期になった。直哉の作品を根底から見直し、作品論と文学史論を兼ねあわせ、その特質を見事に浮かびあがらせた。^⑤平成初期以来、多数の学者が直哉の中後期の小説の組み立て、文学観に関心を持つようになる。近年来テキスト分析理論の発展に従い、志賀直哉の創作方法と思想はより注目されることになり、研究方向が多分化していった。では、氏に対する文学批評の中で最も代表的なものをいくつかまとめてみよう。

^①広津和郎. 志賀直哉論. 現代日本文学全集 20[M]. 東京：筑摩書房、1954、第413頁.

^②稲垣達郎、遠藤祐、祖父江昭二. 近代文学評論大系 5 大正期Ⅱ [M]. 東京：角川書店、1972、第370頁.

^③紅野敏郎. 鑑賞日本現代文学 7 志賀直哉 [M]. 東京：角川書店、1981、第382頁.

^④紅野敏郎. 鑑賞日本現代文学 7 志賀直哉 [M]. 東京：角川書店、1981、第383頁.

^⑤紅野敏郎. 鑑賞日本現代文学 7 志賀直哉 [M]. 東京：角川書店、1981、第384頁.

(1) 広津和郎は「現実を見る眼を甘い涙で曇らされるのがセンチメンタリズム以外の何ものでもなかったと云わなければならない」と自然主義文学を批判し、そういう「現実偏重のために」陥る「センチメンタリズムの濁り」からよく免れている点で、志賀直哉の文学の如きは稀に見るところだと称揚したのである。^①

(2) 正宗白鳥が志賀氏の短篇を「酔乎として酔なる芸術」と述べ、作風は淡彩の日本画の「風韻と雅致」と認めている。^②

(3) 小林秀雄の『志賀直哉一世の若く新しい人々へ』は、直哉のリアリズムが思索と行動の間の深淵を意識しない自然人の所産だと指摘した。^③所論は直哉の実態に強く鋭く肉迫したものとして代表的な評論である。

(4) 須藤松雄の『志賀直哉の文学』で設定された基本構造、すなわち「感情、行動統一体としての自我貫徹」から「調和的傾向」への移行、そのことと対の関係にある「対立的自然関連」から「調和的自然関連」への推移—と異ならない。^④

(5) 芥川龍之介は「「話」らしい話のない」最も「純粋な小説」ととらえ、志賀のリアリズムが「細に入っている」上に「東洋的伝統の上に立った詩的精神が流れている」と説いている。^⑤

(6) 羽仁新五の「志賀直哉」は「自然主義文芸の行詰り」を「喪失せられた主体性の復活」という方法で脱却した「我国近代文芸の最も典型的な輝しき頂点」と認めながら、その中核となる「自我」が「歴史や環境や国情等の条件に根を持たない」「抽象的な純粋さ」に陥ったとして、「我国近代文芸の崩壊を最も典型的な形で反映している」と鋭く批判する。^⑥

(7) 勝本清一郎は、「志賀氏の作品に雅やかな言葉で趣があることの裏には、むしろ血気盛んで働き盛りの人の精神を込めている。」と記している。また「しかし、氏の視野は狭く、積極的に社会に関わる方向から次第に遠ざかって、主

^①平野謙. 志賀直哉とその時代[M]. 東京：中央公論社、1977、第16-17頁.

^②平野謙. 志賀直哉とその時代[M]. 東京：中央公論社、1977、第15頁.

^③小林秀雄. 志賀直哉一世の若く新しい人々へ. 近代名文選—作品とその評論[M]. 東京：日栄社、1980、第64頁.

^④池内輝雄. 志賀直哉の領域[M]. 東京：有精堂、1990、第280頁.

^⑤池内輝雄. 志賀直哉の領域[M]. 東京：有精堂、1990、第260頁.

^⑥池内輝雄. 志賀直哉の領域[M]. 東京：有精堂、1990、第272頁.

Degree papers are in the “[Xiamen University Electronic Theses and Dissertations Database](#)”.

Fulltexts are available in the following ways:

1. If your library is a CALIS member libraries, please log on <http://etd.calis.edu.cn/> and submit requests online, or consult the interlibrary loan department in your library.
2. For users of non-CALIS member libraries, please mail to etd@xmu.edu.cn for delivery details.

廈門大學博碩